

田中英道著「芸術国家 日本のかがやきⅡ—天平時代から鎌倉時代」勉誠出版 2017年4月10日刊を読む

日本では昔から大学教育が行われていた

## 1. ザビエルのいう日本の大学

- (1) 天文十八年（一五四九年）日本にやって来たフランシスコ・ザビエルが、二年余りの滞在期間中に知りえた日本の事情を本国に書簡で送っている。その中でも「大書簡」と呼ばれ、多く読まれた二通の手紙の中に、日本の教育について書かれた部分がある。それは来日してから三ヵ月して書かれたもので、鹿児島の人々から聞いた情報の形をとり、日本の大学について論じている。
- (2) まず、①京都に多数の学生を受け入れているひとつの大学があり、五つの主な学校が付属している。また②京都の周辺には主に四つの大学が高野山、根来、比叡山、近江にあり、それぞれ三千五百人以上の学生を擁している、と述べている。さらに③都から遠く離れた坂東（関東）と呼ばれる地方には日本で最大規模の最も名高い大学があつて（これは足利学校のこと）、それよりも多くの学生が学んでいる。これら主要な大学の他にも、(4) 大学が全国の至るところにたくさんある、と聞いており、是非これらを自身の眼で確かめたい、と述べている（『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』平凡社、一九八五年）。
- (3) ザビエルはおそらく、自分の学んだパリ大学の一部の聖バルバラ学院や、ヨーロッパの主なキリスト教の大学を想定していたであろう。しかし日本にはそれ以上といってもよい多くの大学があり、活発な教育・研究活動を行っていたのである。京都に国立大学が存在したり、各地の有力寺院が、学問寺として大学の機能を果たしていた。「足利学校」についてはザビエルは何度も触れているが、実際この学校は、規模も内容も大きいものであつた。かつてこの学校に学んだ人物が、山口で洗礼を受け、ザビエルと交流したこともあつて、ザビエルには日本の教育に関する知識がかなりあつたのである。
- (4) 特に「寺院学校」の中核と目される学僧の教育機関に対しては、ヨーロッパの大学と比較して強い関心を持っていたようである。というのも、日本の独自の学問体系を持つ大学人たち（僧侶たち）と、イエズス会の神父が論争を行わなければ、彼らを改宗させることは出来ない、と思っていたからである。そのためには、将来日本の大学に神父を派遣し、日本語はいうまでもなく、日本の各宗派の教義の研究をおろそかにしてはならない、と考えていた。それが約三十年後にイエズス会の組織したキリシタン学校、初等学校、セミナリヨ、コレジヨなどが設置される起因になつたといえよう。
- (5) このザビエルの大学情報は正確である。あらためてザビエルを引用しながら強調するのもおかしいことであるが、大学というものは、決して西欧に初めて創設されたものではなく、日本では、ザビエルの来航より九世紀も前から存在していたということを、われわれ日本人は認識すべきなのである。

ザビエルのいう(1)の京都の大学とは、「<sup>だいがくりょう</sup>大学寮」のことである。これは七世紀に創立されたものである。(4)の日本の地方の大学は同じく七世紀に建立された「国学」がそれにあたる。

## 2. 足利学校と金沢文庫

- (1) ザビエルがいう (3) の「都から遠く離れた坂東（関東）と呼ばれる地方には日本で最大規模の最も名高い大学」とは「足利学校」のことである。
- (2) (2) 足利氏の菩提寺である「鑲阿寺」では十四世紀後半、活発な数学活動が行われていたが、そこで「足利学校」が創立された。単に仏教学（内典）ばかりでなく儒学（外典）も教え、学生たちがわざわざ鎌倉から講師を招くこともあったという。広範囲の学問を教え、医学も行われた。応永三十年（一四二三年）に発行された『学校省行堂日用憲章』には、この学校の付属病院の入院心得が書かれている。しかし永享十一年（一四三九年）に、関東の管領（管理人）「上杉憲実」が、この学校の管理に乗り出し、文安三年（一四四六年）には三カ条の校規を制定した。儒教の学校になったのである。
- (3) とくに十五世紀後半、戦国時代のこの学校は最盛期を迎えた。医学、兵学、天文学なども教え、合戦の多かった時代に吉凶をうらなう易学も盛んとなった。時間、方角など戦国大名が実践で必要とする占筮が学ばれた。戦時に必要な医学・医術などとともに、総合的に判断することが出来る軍事顧問の養成が急務となったのである。
- (4) 多くの学生が集まった。医学のほうではたとえば、田代三喜という武蔵国の医師は、京都の妙心寺を経て、「足利学校」で学び、長享元年（一四八七年）に明に留学し、帰国後、この足利に戻って来て、医術を教えるようになった。京都で生まれた曲直瀬道三も十歳で近江国天光寺に入り、十三歳で京都相国寺に学び、二十二歳で「足利学校」に入り、十六年間も田代三喜に学んでいる。京都に戻り医療活動を行い、毛利、豊臣、徳川の各大名に重用された。彼らの学齢をみてもわかるように、「足利学校」はレベルの高い教育を行っていた。それは大学教育と呼んでよい課程を備えていた。
- (5) 同じ関東で北条氏がつくった「金沢文庫」の存在をここで論じるべきであろう。これも、横浜の称名寺の「寺院学校」が、「大学院」クラスの高度の教育を受けさせていたことをよく示す図書館である。この文庫は鎌倉、北条三代の執権の補佐役として働いていた「北条実時」（一二二四～一二七六年）が、三十年に及び典籍を集め、それを基礎として、その後北条氏の四代の執政が集めた典籍が追加されて成立したものであった。その分野は政治、法制、農政、軍事、文学などにまで広がっており、総合図書館の名にふさわしい。これまで平安時代末から鎌倉時代にかけて三善康信（一一四〇～一二二一年）の「名越文庫」、長井宗秀の長井文庫、「二階堂行藤」の二階堂文庫など、それぞれの文人政治家が集めた文庫はあったが、このように充実したものではなかった（結城陸郎『金沢文庫の教育史的研究』吉川弘文館、一九六二年）。

## 3. 初等教育に芸術が加わっている

- (1) そしてザビエルのいう (4) の日本各地の大学には、古くは「国学」があり、鎌倉以後は「寺院学校」がそれにあたる。このようなレベルの高い大学教育が、各寺の「勸学院」や「足利学校」で行われていたし、その下には「寺院学校」があって、初等教育が読み書きの段階から行われていたのである。このことについて述べてみよう。
- (2) 「一村落二寺、全国二万」といわれる寺院がその役割を担っていた（結城陸郎『中世日本の寺院学校と民衆教育の発達』『中世アジア教育史研究』多賀秋五郎編、図書刊行会、一九八〇年）。この時代、「寺院学校」に入ることを、「寺入り」とか「登山」といった。四、五歳で入ることもあったが、だいたい八、九歳であった。そして「下山」は十四、五歳であった。俗人の子供が寺院の生活を基本にして、基礎教育を受けていた、この時代の教育がうかがわれる。
- (3) 美濃の「寺院学校」では武士の少年の学習に励む姿が、万里という歌人の歌にうたわれている。これは十五世紀の五山文学に数えられる『梅花無尽蔵』という詩文集の中にあるものだが、

そこで「少<sup>しょうりん</sup>林」とか「童<sup>どうじか</sup>子科」といわれているのが、少年、童子のための「寺院学校」のことである。武士の少年が興福寺の子院の深窓庵に寺入りしたことも、『多聞院日記』に出てくる。

(4) 貞和五年(一三四九年)から応安五年(一三七二年)ごろに成立したとされる『異<sup>いせいいていきんおうらい</sup>制庭訓往来』は、十二の往復書簡の形で書かれた寺入りした子供の「古往来」(テキスト)であるが、遊戯、喫茶、香、学文(儒学の書目)、習字、和歌、管弦、法事(仏教の儀式・作法)などの科目が並んでいる。これをみても、いかに「芸術教育」が盛んであったかよくわかる。ここには単に「学文」や「法事」といったもの以外は、すべて趣味、芸術に関するものである。無論、兵書や武具、尚武の意などの武士のための教育があるが、いかに「文武兼備の教育」であるかがわかる。これは日本人のももとの「情操教育の豊かさ」を示しているのである。

(5) 毛利元就の家臣であった玉木吉保が残した『身自鏡』では永禄七年(一五六四年)の二月に十三歳で勝楽寺に寺入りし、十六歳に下山するまでの三年間の学習課程が記されている。一年目は一日の大半の時間が文字を書く「手習<sup>てならい</sup>」にあてられる。「いろは」から始まって、仮名文、真名字の習得に励む。朝早くは『先<sup>せんしんきよう</sup>心経』『観<sup>かんのんぎよう</sup>音経』、夜は『庭訓往来』(書簡文例集)や『童子教<sup>どうじきよう</sup>』『式<sup>しきじよう</sup>條』を読書する。二年目は読書に重点が置かれ、儒学の書「四書五経」に加えて、詩歌を声高くうたう「朗詠」、兵法書の『六韜』や『三略』が読まれた。手習いでは草書体、行書体に進んでいる。三年目は漢字の真書体を習い、『古今和歌集』『万葉集』『伊勢物語』『源氏物語』などを読んだ。この他にも和歌、連歌の習作、そして能楽にも取り組んでいたのである。

(6) 「文武両道」がここでも徹底しているということがわかるが、そこで「能楽」に親しんでいることは、手習い、読書とともに芸術を習得することが重要と考えられていたことを示している。絵巻物の中にも、琵琶<sup>びわ</sup>を弾き、笛を吹き、童舞(舞楽)を演じている姿が描かれるが(『桑実寺縁起絵巻』)、寺社には舞楽、神楽、雅楽などが、神事・法会に際して演じられたのである。童舞は、童子が神に近い聖なる存在であると考えられていたこともあって重視されたのである。

4. このようにみてくると、日本のこの時代の学校が「中世」や「戦国時代」の時代名のもとに、時代の停滞を思わせる歴史観とは少なくとも教育の面では正反対であったことを示している。西欧史の概念から来た「中世」という言葉は、日本に適用することは出来ないのである。

P213 ~ 216

<コメント>

江戸時代に先立つ時代にも日本には世界に比肩すべき、否、世界でもまれに見るほどレベルの高い教育があったことがよくわかる。足利学校はその最たるものと誇りに思う。

2018年11月21日(水)林明夫記